

「誰かが怪獣をデザインしているのではないか？」という説が持ち上がったことがある。今から三年前、〈エクステンド〉と共に初めて現れた怪獣はトカゲをそのままスケールアップしたような個体ながらも、その体格は二〇メートル前後と、最近の怪獣と比較して一回り小さな姿をしていた。

だが、その次に現れた怪獣は二メートル前後とやや巨大化し、二二、二三とその身体を大きくしていった。

そして、カブトムシ怪獣が現れた時期を皮切りに、怪獣は強固な甲殻を纏うようになり、〈エクステンド〉の装甲にも劣らない強固な防御力を獲得したのだ。

怪獣を倒すと、次はもっと強い怪獣が現れる。だから、そこに何らかの意思があるのではないか？ と考察する層が出るのも解る。けれど、この説も所詮はネット上で盛り上がった仮説に過ぎず、その信憑性もオカルト的な考察や、誰かの陰謀論程度のものであった。

結局謎は謎のまま。

一ヶ月に一度、現れた怪獣を〈エクステンド〉が倒していく。そんな日常が今日も過ぎゆく筈であった。

だが、誰かが本当に怪獣をデザインしているのなら。そのデザイナーはこう考えたのではないだろうか？

重い甲殻を纏ったところで、結局〈エクステンド〉に砕かれてしまうのならば。いっそ、ウエイトを脱ぎ捨ててより「闘う」ことに特化した怪獣を想像するのはどうかと。

そんな願望の果てに産まれた怪獣が、あの得体の知れない怪獣だったとしたら――



夕星^{ゆうせい}は目の前の現実^{げんじつ}に絶句する。その視線の先にあるのは、ただの鉄屑と化した〈エクステンド〉の残骸であった。

ひしゃげた装甲の隙間から滴るオイルは、ドス黒い血液のようで、それは壊れた機械というよりも、死に絶えた生物を思わせるグロテスクさを内包する。

「……………」

その鉄屑に手を伸ばすも、〈エクステンド〉は夕星の指先が触れた途端、きめ細やかな砂塵と化して崩れてゆく。

残されるのは、山形になった砂だけだ。

そして、頭部と同調するように、向こうで残された首から下のボディもまた砂塵となって消えてしまう。

「な……なんで」

夕星の理解は追いつかなかった。

倒された怪獣の死骸が砂塵となって崩れていくのは、原理が解らなくとも納得できる。きっと怪獣だけが持つ「未知の体組織がどうたら、こうたら、」でと頭の中でそれらしい仮説を立てられるからだ。

だが、〈エクステンド〉は明らかな人工物だ。最先端のテクノロジーの集合体とも言える人型マシンがどうして怪獣と同じように砂塵と化して消えてしまうのか？

そもそも夕星には、「〈エクステンド〉が怪獣に敗北した」という事実自体を受け入れられずにいた。

足元の砂塵を掴むも、それは夕星の指先からサラサラと滑り落ちてゆく。

それはまるで、自分の中にあった〈エクステンド〉への好感や信頼が喪失するようでもあった。

「おい、夕星！ しっかりするんだ！」

十悟^{じゅうご}が激しく肩を揺さぶった。それで、夕星もようやくと我に帰る。

「悪いが、今はショックに暮れてる場合でもなさそうだ……見なよ、アイツの方を」

〈エクステンド〉を倒したあの怪獣は、次なる標的を目の前に聳えるビルへと移したらしい。

腰を入れて踏み込むようにして放つは、空手の「突き」であった。

ボクシングや中国武術のみならず、日本の空手まで会得しているとは。ビルの窓には亀裂が走り、拳との衝突部に生じたクレーターからへし折れてゆく。

「俺たちは想像しなくちゃいけないのかも……〈エクステンド〉が負けた後のことを」

そうだ。

夕星はイメージする。これまで勝ち続けてきた〈エクステンド〉が負けてしまったあとの日常がどうなるかを？

あの怪獣は破壊の限りを尽くすのであろうか。それともどこかの誰かがミサイルや戦闘機であの怪獣を撃ち倒してくれるのか。

どう思考を巡らせたって、夕星のイメージが辿り着くのは廃墟となった街と、犠牲となった人々の山であった。

今更ながらに陽真里^{ひまり}の警告を思い出す。「〈エクステンド〉と怪獣の闘いを楽しむのは不謹慎である」と。

きっと自分は幼稚で、彼女は真っ当だったのであろう。そんな時、不意に怪獣が動きを止めた。両腕をダラリと下げたまま沈黙する。

もしかしたら街を壊すのに飽きて、このまま空に帰ってくれるのでは、と淡い希望を抱くのも束の間であった。

怪獣の顔が横に裂け始めたのだ。そこから覗くのは鋭利な牙と、テラテラと粘液質な輝きを

放つ舌。

「フツ……フツ……」

怪獣が口を開けたのだ。そして、音を詰まらせながらも何か言葉を紡ごうとする。

「フツジ……フツジ……モリ」

口が縦へ、横へと形を変えて。

「フジモリツ……ヒツ……ヒマリ……」

フジモリヒマリ。——そのワードは夕星の中ですぐさま「藤森陽真里」の名へと変換される。

「アイツ、今陽真里ちゃんの名前を呼んだよな？　けど、どうして……って夕星!？」

今度は思考を巡らせるよりも速く、身体が動いていた。

それはほとんど条件反射のように。夕星は弾かれた弾丸の如く、走り出す。

「ツッ!！」

だが、虚しいかな。沈黙した怪獣が再び歩き出せば、その振動で足元が揺れ、夕星は派手に転ばされた。

怪獣はそのまま、向こうへと。夕星たちの通う天川あまのがわ高校へと進路をとった。

たしか陽真里は、委員総会で今頃も学校に残っている筈だ。だとしたら、あの怪獣は何らかの器官を用いて陽真里の居場所を補足しているのではないだろうか。

直観はほとんど確信へと変わった。

「クソツ……十悟、この辺りに駐輪場はないのか！　このまま走っても、野郎にはとてもじゃねえが追いつけない!！」

「いや、何言ってるんだ!？」

「だから駐輪場はなかったか聞いてるんだよ！　緊急時なんだ、前科が付くのも構うもんか。とにかく自転車でもバイクでも盗めるもんを盗んでヒバチを助けに行くんだツ!！」

「夕星、少しは頭を冷やすんだ……仮に都合よく自転車やバイクを盗めたって、それであるの巨体の歩行速度に追いつけと思うか?！」

「それでもツ！　あの怪獣はハッキリとヒバチの名前を呼んだんだ！　それに何でかアイツの居場所もバレてるんだぞ!！」

既に夕星の頭の中を埋めるのは、藤森陽真里のことだけだ。彼女を助けに行かなければ。——そんな想いだけが先走る。

「じゃあ、夕星。俺もハッキリ言わせて貰うが、君が陽真里ちゃんの元に駆けつけたとして、それが何になるんだよツ！　どうにもならないことくらい少し考えれば解るだろうがツ!！」

十悟のぶつけたてきたそれは、どうしようもないくらい正しい正論である。

相手は鉄の巨人も、無数のビル群をも容易く壊してみせる怪獣。

対する自分は中学の頃に多少荒れていた程度で、ミーハーなオタク趣味を持つだけの高校生だ。

スケールも何もかもが違いすぎる。

「それとも、君には何かあの怪獣を倒す作戦があるってのか？」

「そ、それは……」

そんな作戦が思いつけるのであれば、既に行動に移している。何も思いつけないからこそ、こうやって言葉に詰まっているのだ。

「もしも、あの怪獣を倒せるだけの力が自分にあったなら」と、そんな願いが頭の片隅をよぎった。

「あの怪獣の脅威から陽真里を守れるのなら、自分はもうなっていない」と、そんな願いを胸のうちで強く抱きしめる。

——けれど、「願いたい」とは所詮「願いたい」に過ぎない。

「畜生ッ！」

夕星は募る苛立ちを吐き捨てようとして、ふと自分の足元に少量の砂塵が付着していることに気づかされた。

〈エクステンド〉を形作っていた、あの砂塵だ。

初めは転んだ拍子にくっついて来たのかと思った。だが、それも違うということにすぐに気が付かされる。

無数の砂塵は夕星の足元を伝い、気づけばずっと背負ったままになっていた鞆へと集まっていく。

「おい、夕星……それって」

十悟も異変に気付いたようだ。そして次の瞬間には、鞆から何か飛び出していた。

鞆へと集まっていた砂塵も、宙へと飛び出したそれに続く。

さらに向こうの路地からは〈エクステンド〉の首から下を形作っていたであろう砂塵の波が押し寄せて、それを中核に何かを形作っていた。

夕星には、その正体がすぐにわかった。砂塵の中核は、自分が寝る間も惜しんで作り上げ

た^{百分の一}／一〇〇スケールのプラモデルであると。

やがて、寄り集まった砂塵はヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群を完成させる。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、全身が刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシンの名は、

「〈エクステンド〉」

夕星の声に応えるよう、鉄の巨人は今再び地面に立ち上がる。